

## 現代建築「改修」作品における創作論および設計法

ー2000年以降の内藤廣の独立住宅「改修」作品の考察ー

## The Theory of Creation and Design Methods in Contemporary "Renovated" Architectural Works

- a Study of Hiroshi Naito's "Renovated" Independent Residential Works Since 2000 -

○梅田武宏（神戸大学大学院，ウメダタケヒロ建築設計事務所）<sup>\*1</sup> 末包伸吾（神戸大学大学院）<sup>\*2</sup>  
 増岡亮（大阪工業大学）<sup>\*3</sup> 後藤沙羅（神戸大学大学院）<sup>\*4</sup>

<sup>\*1</sup> Takehiro UMEDA, Graduate School of Eng., Kobe Univ., 1-1, Rokkodai, Nada, Kobe, 6578501, tumeda@umedarchi.com

<sup>\*2</sup> Shingo SUEKANE, Graduate School of Eng., Kobe Univ., 1-1, Rokkodai, Nada, Kobe, 6578501, suekane@people.kobe-u.ac.jp

<sup>\*3</sup> Ryo MASUOKA, Osaka Institute of Technology, Chayamachi, Kita, Osaka, 5308568, masuoka28@gmail.com

<sup>\*4</sup> Sara GOTO, Graduate School of Eng., Kobe Univ., 1-1, Rokkodai, Nada, Kobe, 6578501, saragoto@people.kobe-u.ac.jp

キーワード：現代建築，改修，言説，内藤廣

## 1. はじめに：研究の背景と目的

20世紀後半を通して蓄積された大量の建築ストックを再活用するリノベーションは2000年前後にその萌芽を見る。<sup>01)</sup> <sup>02)</sup>近年は建築家の創作活動としての「改修」行為が定着し、建築メディアでも頻繁に「改修」作品が発表されている。それらの多くは新旧の要素の特徴を活かした「改修」ならではの意匠表現や空間性を持ち、新築にはない魅力を携えている。一方で「改修」ならではの制約や個別要件への対応から、そこで行われている建築家の創作行為は個別の評価に委ねられ、「改修」創作論としての普遍的枠組みの提示や設計法の展開性は示されていない。文化的に成熟し、持続可能な都市環境を築いていく上で「改修」創作論を巡る議論は今後ますます重要となるだろう。このような認識から本研究は建築家の「改修」行為を個別の建築表現の枠組みを超えた包括的な視点で捉え、物理的延命としてではない真に持続的な「改修」とは何かを問い、「改修」創作論および設計法の特質と意義を明らかにすることを目的としている。

## 2. 分析対象

本研究は、『新建築』誌および『住宅特集』誌に掲載された建築家の設計による独立住宅「改修」作品を対象としている。このうち本稿は研究の一環として、建築家内藤廣(1950-)の独立住宅「改修」作品の考察を行うものである。

内藤は学生時代に吉阪隆正に学び、フェルナンド・イゲラス建築設計事務所、菊竹清訓建築設計事務所を経て、1981年内藤廣建築設計事務所を設立。『素形の建築』<sup>03)</sup>と称し、独立住宅から公共建築まで日本の風景や地域環境に根付いた記憶や時間に寄り添う建築をつくり続けてきた。著書の中でも建築・土木のデザイン評価について“どのような豊かな時間が生み出されたか”<sup>04)</sup>が重要であると述べ、空間価値から時間価値への転換を提唱している。{住居 No. 1 共生住居}の「改修」設計に際し、“暮らしの変化は留まる所を知ら

ない。常に変化し続ける。それでよいのだ。”<sup>05)</sup>と語り、“それでも35年前に打設したRCの壁と床は、この変化を受け止めてくれるものと思う。”<sup>05)</sup>と続けている。そこでは「改修」を通して建築の時間と空間の関係が示唆されており、「改修」創作論の特質の探求につながる手掛かりがあると考えられる。よって、本稿では多様な用途・規模の建築物を創作し、著述により広く建築思想を表明してきた内藤の独立住宅「改修」作品を対象とし、「改修」創作論と設計法について考察する。

## 3. 内藤廣の独立住宅「改修」作品にみる創作論の分析

## 3.1. 分析対象と概要

分析対象は本研究対象である、独立住宅「改修」作品のうち、2000年以降に竣工した内藤廣による4作品、6論考とする。(表1)

なお、論考番号(02 ii) (03)は本研究では分析対象外としている併用住宅への「改修」、論考番号(04 i)は2000年以前の竣工作品の論考だが、本稿では内藤廣の創作論の分析を深める上で重要な資料として分析対象とする。

表1 分析対象論考

論考番号	『新建築住宅特集』掲載号	作品名	竣工年	備考
01	2002. 07	住居No. 22	2000. 11	
02 i	2004. 09	住居No. 23	2001. 12	改修1回目
02 ii	2020. 09		2016. 08	改修2回目
03	2006. 12	住居No. 29	2006. 05	
04 i	1995. 11	住居No. 1 共生住居	1995. 03	改修1回目
04 ii	2019. 02		2017. 10	改修2回目

### 3.2. 分析方法

創作論の分析では作品論考に関する言説分析を行う。「改修」に関する創作論を総体的に分析するため、作品論考から『主たる創作の意図』について述べられた重要言説を抽出する。次に重要言説から鍵語を導く。鍵語の導出では重要言説の前後の文脈を考慮の上、原文の意味が変わらない程度に文言を整理及び補間する『構造化(表2)』の作業を行う。さらに導出した鍵語の概念水準を考慮の上、KJ法に準じて整理し、鍵語の『階層化』を行う。鍵語の階層構成(表3)から創作論の総体を把握し、鍵語の意味と関係を検討する。加えて、鍵語間の関係を分析した概念構造と相関(図1~3)を作成し、内藤廣の「改修」に関する創作論の概念構成を相対的に分析し、その特質を考察する。なお、この言説分析方法は、共著者の末包らによる研究<sup>66) 67)</sup>の方法に準拠したものである。

表2 重要言説の構造化の例

論考番号	原文(重要言説)	構造化	鍵語
02 ii -02	この大きな増築部分は、保存したスチール部分を手掛かりに、なくなった母屋の記憶を間接的に受け継いでいる。	保存した部分を手掛かりとして、解体した母屋の記憶を受け継ぐ。	手掛かり 記憶の継承(個別的)

### 3.3. 創作論の概観

前節の分析を行った結果、第1水準の鍵語を【設計思想】および【方法論】とする階層構成(表3)が導かれた。この構図は建築家の創作における基本的な思考過程である『創作理念→具体的設計』の各段階の思考方式に符合し、創作論を総合的に考察するための有効な指標であると言える。よって本稿では【設計思想】および【方法論】を第1水準の主要概念とし、それを軸として創作論および設計法を分析する。第2水準は第1水準の従属概念を意味し、第3水準は第4水準の鍵語から導出された従属概念の中での思考対象である。内藤の思想が強く反映された重要言説を構造化した思考内容は主に第4水準の鍵語となった。以降、第1水準の鍵語を【】、第2水準を《》、第3水準を〔〕、第4水準を〈〉で示し、文献から抽出した言説には“ ”を付し、文末に( )により文献番号を示す。

### 3.4. 創作論における【設計思想】に関する言説の分析

第1水準の主要概念である【設計思想】は、創作の根底にある内藤廣の設計思想や理念に関係する言説である。第2水準は建築の基礎概念である《空間の概念》を中心として、対象作品の特徴である《住まいの概念》が並ぶ。さらに研究の視点である《「改修」の概念》に加え、「改修」の近接概念として《時間の概念》および《記憶の概念》を分析し、建築の時間的価値と文化的意味を含めた本質的側面が把握される。

次に第2水準以下の各鍵語について、構造化した重要言説を引用しつつ、意味の階層性と鍵語の関係を考慮の上、検討を加えていく。

#### 1) 《時代背景》

内藤は[歴史]および[時代精神]について“記憶を廃棄することが経済大国の住人の生活術として捏造されてきた。喧噪の時代は過ぎ去り、過去から栄養をもらわなければ未来は花開かない。(01-09)”と述べ、経済成長期の日本では

《記憶の価値》が軽視されてきた一方で、《時代は変遷》し、価値観の転換が希求されるとする。また、“住宅は少なからず生活を制度の枠内に巻き込んでしまう宿命を負っている。法律、経済、隣人とのつき合い、さまざま社会的制約を負って立ち上がる。(03-01)”からは、住宅が自律した存在ではなく様々な《社会的制約》との相互関係で成立するものであるという認識が読み取れる。これらの視点は社会構造や時代背景との応答関係のなかで創作を重ねてきた内藤の【設計思想】に通底するものといえる。

#### 2) 《「改修」の概念》

《「改修」の概念》について直接明言したものはないが、「改修」の[意図]を“庭は改築前の面影を留めながら、現代的な感性の入った場所へと再生した。(01-08)”からは新たな性質をもつ場所への《再生》として、“今回の改築は、大きな変化の後だった。・・・大きな領域は無人となった。・・・ガランとした隣の空間をそのままにしておくわけにはいかない。暮らしを立て直すために、大きな改築をした。(04 ii -05)”では生活のあり方を切り替えるための《生活の刷新》について語られ、内藤の考える《「改修」の概念》の一端を捉えることができる。「改修」の[難題性]について触れられた“要望や敷地条件の難しさの交差点のような場所で、あちこちから攻め立てられているようなスペースだ。・・・増改築は難しい。(02 i -02)”には、「改修」が付随する《複雑な設計条件》に基づく制約の多い不自由な創作行為である旨が示されている。

#### 3) 《住まいの概念》

“住宅は変化する生活を支える器だと思う。(04 ii -03)”  
“住宅は人間の生と死が通過する駅のようなものではないか。時間帯がうまく合えば、ホームには幾列もの客車が同時に停まり、それが家族というわけです。(04 i -03)”これらの言説には、内藤の住まい観が強く表れている。住まいの[本質]は《変化する生活》の場であり、人間の《生と死の場》である。すなわち、合理的な機能としての建物ではなく《時の流れ》による生活の変化や人と人の関係を含む人生の舞台として認識されている。さらに“よい住環境を得るためには、小さな住まいほど住み手の住みこなしが重要だ。(02 i -04)”“雑誌では住宅が次々と発表される。・・・それは空間のバリエーションの提案であって、住宅ではそこで過ごされる「時間」こそが主要なテーマではないか。(04 ii -04)”と述べ、変化する生活を前提とした上で、住み手の《住みこなし》や《過ごされる時間》にこそ「価値」を置くべきものとする。{住居 No.1 共生住居}では“一緒に住むのは難しい面もあるが、いい面もたくさんある。娘たちは祖母のよもやま話をいやというほど聞いていて、世代間の情報伝達の本質的な部分もこういう中で自然になされたのではないか。(04 i -02)”と回顧し、《変化する生活》の場に居合わせる「住み手の特性」に応じた物語や《世代間の伝達》の価値が語られている。

#### 4) 《空間の概念》

建築の基本概念である《空間の概念》についての言説である。“住み手が自由に住み方を展開できるように、できるだけ簡素でシンプルな構成にした。(02 ii -05)”“意図的に無為のままに残された隙間がたくさんある。それをどのように埋めていくか、どのような時間を織り上げていくか、空間を生み出す主体は住み手にある。(03-08)”ここでも内藤

表 3 鍵語の階層構成

【第1水準】	《第2水準》	[第3水準]	〈第4水準〉	論考番号
設計思想	時代背景	歴史	時代の変遷	01-09
		社会	社会的制約	03-01
		時代精神	記憶の価値	01-09
	「改修」の概念	意図	再生	01-08
			生活の刷新	04 ii -05
	住まいの概念	難題性	複雑な設計条件	02 i -02
		本質	生と死の場	04 i -03
			変化する生活	04 ii -03
		価値	住みこなし	02 i -04
			過ごされる時間	04 ii -04
	空間の概念	構成原理	世代間の伝達	04 i -02
			空間の自由度(2)	02 ii -05,03-08
		空間の意味	隙間のある空間	03-08
			変化を受け止めるもの	04 ii -09
		表象するもの	時間の堆積	01-01
			記憶の残像	01-06
		中心性	空間の核	03-05
		空間の表情	懐古性	03-06
		空間の性質	光の空間	03-07
	時間の概念	持続性	時間の蓄積	03-08
			時間の接続	01-02
		表象される時間	時の流れ	04 ii -01
			死の象徴	04 ii -02
	記憶の概念	記憶の継承(集団的)		02 ii -01
		記憶の継承(個別的)(2)		01-10,02 ii -02
	周辺概念	アート	感覚の世界	03-02
	創作	意図	無作為(2)	02 ii -04,03-03
		意識	ものづくりの緊張感	03-04
			思考の滞留	01-11
		作品性	プロジェクトの個性	02 i -03
方法論	空間構成	構成形式	構成形式の継承	02 ii -03
			単純な構成	02 ii -05
		ボリューム	ボリュームの増減(2)	01-04,02 i -01
	空間要素	領域	領域の一体化	04 ii -06
		部材構成	部材の再生	01-05
			部材の再利用	03-05
		構造	自立構造体	02 i -03
		調度類	設えの挿入	04 i -04
			既存の継承	04 ii -07
	空間特性	光の導入		03-07
	空間表現	新と旧	スケールの調整	01-07
		表情	色彩の対比(2)	04 i -01,04 ii -08
	手法	新と旧	手掛かり	02 ii -02
		最小限の操作(2)		01-03,02 ii -03

は空間 [構成原理]として住み手の生活について触れ、その展開の余地として〈空間の自由度〉が高いシンプルな構成により空間を成立させること、またその余地そのものを〈隙間のある空間〉と位置付けている。さらに、[空間の意味]については主要な空間構成要素を生活や時間の〈変化を受け止めるもの〉として次のように論じている。“改築後の空間はやけに広い、この空間の広さ間尺に合うには数年が必要だろう。・・・暮らしの変化は留まる所をしらない。常に変化し続ける。それでも35年前に打設したRCの壁と床はこの変化を受け止めてくれるものと思う。(04 ii -09)”一方、その

ような空間が[表象するもの]として、“いくつものアートが無造作に置かれた既存の空間には時間の層があり、アートが暮しに堆積された時間を照らし出していた。(01-01)”では〈時間の堆積〉を“特別な何か、痕跡や記憶の残像のようなものが、われわれ第三者にも空間の肌触りを通して伝わってくる。(01-06)”では〈記憶の残像〉を挙げており、時間や記憶を想起させるものとして、物体としての建築に精神的な意味を付与している。

現象する空間の思考対象としては [中心性] [空間の表情] [空間の性質]を導出した。“施主の愛着のある建具を残

し、室内意匠の一部として再利用することにした。・・・これが空間の主演になっている。(03-05)”からは既存の建具を〈空間の核〉に据えたこと、“最先端の感性を追い求める作家のアトリエに、レトロな要素が入り込む。(03-06)”では、〈懐古性〉を肯定的に組み入れ、「改修」空間ならではの表現が企図されている。また、“シンプルな片流れの屋根を架け、大きなトップライトとハイサイドライトをとって、光がアトリエ内に柔らかに充滿するように工夫した。(03-07)”は抽象度の高い〈光の空間〉への志向が窺われる。

## 5) 《時間の概念》

内藤は時間について[持続性]という観点から論じている。“意図的に無為のままに残された隙間がたくさんある。それをどのように埋めていくか、どのような時間を織り上げていくか、空間を生み出す主体は住み手にある。(03-08)”“時間をつないでいくことは、新しくつくることより手間がかかるが、それだけの価値はある。(01-02)”これらの言説からは、空間に住み手の生きる〈時間を蓄積〉してくことで住み手の空間がつくられていくこと、「改修」の意味を〈時間の接続〉とし、新しくつくることに対比させている。〔住居 No.1 共生住居〕では環境によって[表象される時間]について述べている。木蓮の木を“2階の書斎の目の前に木蓮の伸びやかな枝張りが間近に見える。・・・巡りくる季節、来るべき春、生々流転、さまざまものを想起させてくれる。(04 ii -01)”ものとして、〈時の流れ〉の象徴と見立てている。また、桜の木については“庭少し距離を置いて見事な枝振りの桜の木がある。・・・桜の足下には、人の代わりにこの家で共に暮らした動物たちが眠っている。(04 ii -02)”から生命の時間を意味する〈死の象徴〉に喩えている。

## 6) 《記憶の概念》

記憶については語られ方が様々で抽象概念への言及は見られない。本稿では「改修」に際し[記憶を継承]することが意図された言説を重要言説とし鍵語[記憶の継承]を導いた。ここで、建築の外観など敷地外からも認識できる公共性を帯びたものを(集団的)、住み手のなかだけで共有される固有のものを(個別的)と定義する。[記憶の継承(集団的)]では“改築・増築のさらに増築ということになり、連歌のように前のイメージを引き受けながらまったく新しくなった。(02 ii -01)”とし、前のイメージ=記憶を空間構成に引き継いでいる。他方、[記憶の継承(個別的)]は“過去や記憶にこだわることは手間がかかり、労力も気力も使う。(01-10)”という、「改修」行為自体の本質的意味として《記憶の概念》に言及されたものや、“保存した部分を手掛かりとして、解体した母屋の記憶を間接的に受け継いでいる。(02 ii -02)”からは 母屋という住み手の記憶の蓄積された心象風景を継承した事実が示されている。

## 7) 《周辺概念》

建築の《周辺概念》への言説は[アート]に関するものが抽出された。“アートとは常識を破り、感覚の世界から日常生活の欺瞞を脅かすものだ。実世界を突き抜けた虚構の先に、真実を暴き出すものだ。ここに立ち入ってはいけない。(03-02)”からは、[アート]を〈感覚の世界〉の創造行為と位置付け、後述する建築的〈無作為〉と対照的に述べられる。

## 8) 《創作》

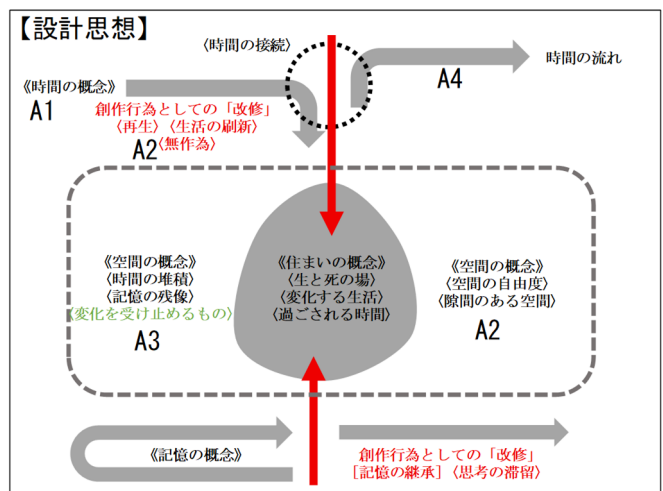
創造行為に対しての建築家の姿勢を意味する《創作》の思考について分析する。“設計で心がけたのは、作品的でない

作品、作為的でない作為、とでも言い得るものかもしれない。(02 ii -04)”“建物の中に設計者の意図や意識が混ざり込むことはできるだけ避けた。デザインを意図的に後退させること、・・・機能にしたがって淡々とつくること、意識的に凡庸であること。要約すれば、「意図的に無為であること」を心がける。(03-03)”創作の[意図]について内藤は 感覚的なデザインではなく、[意図]を感じさせず淡々と機能的につくことを念頭に置く。それを意味する〈無作為〉という鍵語が複数回見られることからその重要性が把握できる。建築家の創作[意識]としては“クリエイティビティから距離をとりつつ、モノづくりとしての緊張感は保持しなければならない。(03-04)”とし、即物的な〈無作為〉の創作行為の中でも〈ものづくりの緊張感〉を持ち続けることの重要性を説く。さらに「改修」という難題に対しては、“思考の滞留のなかで時間の淀みやその肌触りを感じ取る。だとすれば、その滞留こそが豊かさの資質ではあるまいか。(01-11)”と問い、「改修」という建築行為は〈思考の滞留〉を伴い、そのかなで空間に蓄積された時間〈時間の堆積〉や記憶〈記憶の残像〉を掬い取るものであり、それは暮らしの豊かさにつながるものとして[意識]されている。「改修」行為の[作品性]に関して“既存部に負担をかけないスリムなコの字型の自立した構造体をつくるしかない。一番困難な条件をクリアするところがプロジェクトの最大の個性になる。(02 i -03)”こと、つまり「改修」特有の[難題性]を〈プロジェクトの個性〉に変えることに創造的価値を見出している。

## 3.5. 創作論における【設計思想】に関する概念構造

前節の分析結果を踏まえ、【設計思想】に関する概念構造を図示する。(図1)

図1 【設計思想】に関する概念構造



言説分析の結果、【設計思想】に関する概念構造は《住まいの概念》を核とし、《空間の概念》が全体を取り囲む構図となった。《空間の概念》の輪郭は、〈空間の自由度〉と〈隙間〉を表す破線とした。自由度の高い《空間の概念》の輪郭を〈変化を受け止めるもの〉が保持する構造をもつ。上部横軸に《時間の概念》を下部横軸に《記憶の概念》を矢印で表記した。《「改修」の概念》は縦軸の矢印であり、〈時の流れ〉や〈記憶の継承〉を伴いながら、住まいと空間に改変を加える行為として図示した。概念構造から内藤の【設計思想】について以下の特徴が読み取れる。

- A1)《住まいの概念》の核には〈変化する生活〉があり、それは《時間の概念》の思考と共にある。
- A2)自由度の高い〈隙間のある空間〉を〈無作為〉の意図により創作する。
- A3)空間には〈変化を受け止めるもの〉と時間や記憶を〈表象するもの〉が存在する。
- A4)「改修」は単なる保存行為ではなく、新たな空間性を創出するものである。つまり、時間の部分的切断と接続を伴う創作行為である。

### 3.6. 創作論における【方法論】に関する言説の分析

第1水準の主要概念である【方法論】は、【設計思想】を具体化する際の設計手法に関する言説である。第2水準は空間的手法の基礎概念である《空間構成》を中心として、目指すべき空間像を特徴づける《空間要素》《空間特性》《空間表現》の従属概念と併せて、その本質的側面が把握される。さらに《手法》の観点からの分析を加え、新旧の空間要素が編集される「改修」設計手法の基本構造が明らかになる。

次項より第2水準以下の各鍵語について、構造化した重要言説を引用しつつ、意味の階層性と鍵語の関係を考慮の上、検討していく。

#### 1)《空間構成》

《空間構成》における[構成形式]は「改修」行為ならではの特徴を持つ。「配置も平面もほとんど同じだ。新しく付け加えたものといえば、単管足場の仮設材料でテラスをつくったことだ。(02 ii-03)」では既存の〈構成形式を継承〉することで構成の骨格が決定づけていること、また、「住み手が自由に住み方を展開できるように、できるだけ簡素でシンプルな構成にした。(02 ii-05)」からは〈空間の自由度〉を高め、住み手の生活の余地を残すために〈単純な構成〉が採用され、《設計思想》の「構成原理」との対応関係が確認できる。思考対象としての[ボリューム]は「奥の鉄骨造と母家の居間を残し、手前の小部屋を壊して幅の狭い2階建ての建物を建てることにした。(01-04)」“既存部の中で収めるにはスペースが足りない。足りない分を張り出して増築した。(02 i-01)”に見られるように、既存の制約の中で生活に必要なボリュームを細かく増減(ボリュームの増減)する手法を中心に展開される。また、[領域]では“1番大きな変化は、30年間2世帯を分けていた中央の本棚の下部を取り除き、1階を一体的に繋げたことだ。(04 ii-06)”とあるように生活領域の変更ために境界部分を作り変え、〈領域を一体化〉する作品が確認できる。

#### 2)《空間要素》

“ダメになっている部分は取り替え、整理し、再構成した。(01-05)”“施主の愛着のある建具を残し、室内意匠の一部として再利用することにした。・・・これが空間の主役になっている。(03-05)”。これらの言説は「改修」行為特有の手法である[部材構成]の再構成について、既存部材を丁寧に観察し、愛着や記憶を繋ぎながら〈部材の再生〉と〈部材の再利用〉する試みとして説明されている。[構造]=スケルトンに関する言説は「既存部に負担をかけないスリムなコの字型の自立した構造体をつくるしかない。一番困難な条件をクリアするところがプロジェクトの最大の個性になる。(02 i-03)」があり、既存部分との構造的・空間的制約を解決するために特殊な〈自立構造体〉が企図されたことを示す。

一方、[調度類]≡インフィルに関しては“椅子のスタン

ダードをつくってみたくなった。・・・一日座っても疲れな  
い椅子・・・上でいろんな姿勢がとれ、低く抑えて成立する。  
テーブルはこの椅子にあわせて高さを決めた。・・・目線の  
高さが10cm違えばまったく違う空間が見える、日本の住宅  
の場合はもう少し低くするべき。(04 i-04)”とし、既存の  
空間像と生活様式を徹底的に考え抜いた制作椅子を配置し  
〈設えの挿入〉、日本的空間の高さの問題について思考した  
言説のほか、“家具はほとんどのものが旧宅のままだが、新  
しい居間のカーペットだけは、同じアフガンカーペットを  
手に入れて敷いた。壁には数年前に手に入れたガンダーラ  
の頭彫を守り神のように掛けてある。(04 ii-07)”と述べる  
ように、時間を蓄えた骨董ともいえるなじみのある調度を  
継承(既存の継承)したものへの言及がある。

#### 3)《空間特性》

空間の性質に係わる《空間特性》は[光の導入]に関して述  
べられた1言説のみであった。“シンプルな片流れの屋根を  
架け、大きなトップライトとハイサイドライトをとって、光  
がアトリエ内に柔らかく充満するように工夫した。(03-07)”  
とし、「改修」特有の建物配置の制限に対して空間用途や目  
指すべき空間像から要求される[光を導入]するための操作  
について語られている。

#### 4)《空間表現》

「改修」では新設部分と既存部分の関係[新と旧]が空間  
表現の主題となる場合がある。“小さな建物だから増築部は  
できるだけ細い部材で構成された鉄骨造とした。(01-07)”  
からは新旧部材のスケールの違和感を解消するため〈スケ  
ールの調整〉を行う意図が確認できる。空間の[表情]に関す  
る手法としては、“塀は室内から見たときに、芝生があつて  
そこから黒い壁が立ち上がる、黒と緑のコントラストをや  
って見たかった。(04 i-01)”“新しい居間の中心にはフリ  
ッツハンセンの天板を台の上に置いて使っている。この白  
いテーブルが、やや落ち着き過ぎた空間に明るい印象をも  
たらす。(04 ii-08)”と語り、〈色彩の対比〉により新旧要素  
の混在した屋外・屋内風景のバランスを調整する試みが読  
み取れる。

#### 5)《手法》

「改修」特有の《手法》の作法論に関する言説を検討する。  
“保存した部分を手掛かりとして、解体した母屋の記憶を  
間接的に受け継いでいる。(02 ii-02)”では[新と旧]要素の  
兼合いの中で、旧要素(既存部分)が創作の起点〈手掛かり〉  
として、新要素(新設部分)の構成に活かされている。また、  
[最小限の操作]も特徴的な操作手法である。“可能なかぎ  
り手を加えず、機能を加えられないか。(01-03)”“配置も  
平面もほとんど同じだ。新しく付け加えたものといえば、単  
管足場の仮設材料でテラスをつくったことだ。(02 ii-03)”  
からは既存の環境に対する配慮や空間的制約への対処が窺  
える。

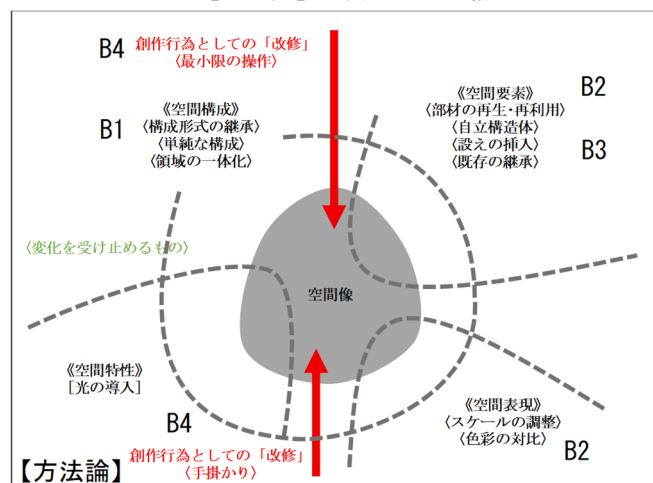
### 3.7. 創作論における【方法論】に関する概念構造

前節の言説分析の結果、【方法論】に関する概念構造は、  
《空間構成》により建築の枠組みが形成され《空間要素》《空  
間表現》《空間特性》により各作品の個性が特徴づけられる  
ことが確認できた。(図2)また、その中心には目指すべき空  
間像がある。これは【設計思想】の鍵語として導出された〈空  
間の自由度(02 ii-05, 03-08)〉〈隙間のある空間(03-08)〉〈光  
の空間(03-07)〉〈記憶の残像(01-06)〉などの抽象的思考内



容を実空間に具現化する際の媒体となるものである。空間像という概念と言葉への直接の言及はないが、創作の思考過程を明らかにする上での基本概念として検討する。またここでも【設計思想】の概念構造と同様、「改修」の概念を縦軸の矢印で示し、空間の隙間や既存要素を〈手掛かり〉にして「改修」《手法》が展開されることを図示している。これらのことから内藤の【方法論】の概念について以下の特徴が読み取れる。

図2 【方法論】に関する概念構造



- B1) 《空間構成》は既存の〈構成形式の継承〉または単純な構成をとる。  
 B2) 《空間要素》の再編と対比的《空間表現》により、新旧要素が複合(重層)した空間像が企図される。  
 B3) 〈変化を受け止めるもの〉として構造体が挙げられる。  
 B4) 「改修」《手法》は既存要素を〈手掛かり〉とし、〈最小限の操作〉で行われる。

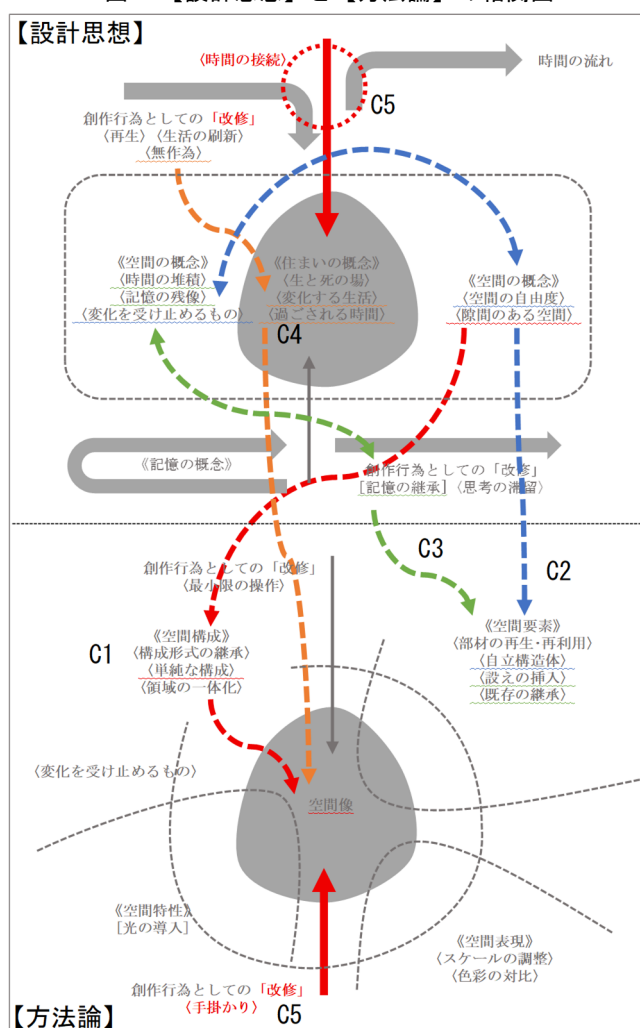
### 3.8. 創作論における【設計思想】と【方法論】の相関

前節までの創作論の分析結果を総合的に検討し、【設計思想】と【方法論】の相関を考察する。前述の通り、本稿では建築家の創作における基本的な思考過程である『創作理念→具体的設計』の流れに基づいて分析を進めている。よって本節の相関の分析でも【設計思想】がいかに【方法論】として展開されたかを検討することで、内藤の創作論の特質を明らかにする。検討は3.5.【設計思想】の概念構造から導かれたA1)~A4)の4つの特徴と3.7.【方法論】の概念構造から導かれたB1)~B4)の4つの特徴の関係を言説分析の内容を踏まえて精査した。その結果、(図3)の相関図に示す関係を見出した。ここからは次の5つの特徴が述べられる。

- C1) 空間像は〈単純な構成〉の〈隙間のある空間〉として立ち上がる。(A1×B1)  
 C2) 構造体は変わらないものとして、自由度の高い空間を統合する。(A2×A3×B3)  
 C3) 時間や記憶を想起させる《空間要素》が再編される。(A1×A4×B2)  
 C4) 〈変化する生活〉を支える懐の深い空間像は建築家の〈無作為〉により生成する。(A1×A2)  
 C5) 「改修」行為の意味は時間の部分的切断を伴いながら接続する時間の概念として、また既存要素を手掛かりとして参照しながら行う創作手法として、間接的に掴み取ることができる。(A4×B4)

内藤は著書の中で、《時間の概念》について次のように述べ、福岡伸一(生物学者)の動的平衡の概念に触れている。“二〇世紀が「あくなき空間占領に狂奔した時代」だったとすれば、かつてのように激しく代謝更新することを理想とするのではなく、二一世紀はもうちょっと落ち着いて、中身は変わっていくけども常に平衡を保っているような動的平衡を求めるべきではないか。”<sup>08)</sup>と、本章で析出された〈変化する生活〉をこの『中身の変更』とすると、それは住み手の生きる時間と建築の生きられる時間のなかで平衡を保ちながらゆるやかに変化していくべきものであるという。すなわち、内藤にとっての「改修」とは住まいが時間と空間の平衡を保ちながら、しなやかに再編されていく流れ中でのひとつの接続断面である。ここに内藤の独立住宅「改修」作品の創作論の特質を見出すことができる。

図3 【設計思想】と【方法論】の相関図



### 4. 内藤の独立住宅「改修」作品にみる設計法の分析

本章では前章までの分析結果を踏まえ、主要な「改修」作品の2作品の設計法の分析を行う。分析項目は創作論の分析により析出された特徴を基に設定する。前章3.8.において【設計思想】と【方法論】の相関からC1)~C5)の特徴が得られた。これらの鍵語や重要事項が内藤の住宅「改修」作品の創作に持つ意味と効果を考慮の上、空間分析項目として【方法論】の鍵語である〔構成形式〕〔構造〕〔調度類〕を設

定する。さらに分析の視点としては〔作為〕〔手掛かり〕〔再編〕〔変化を受け止めるもの〕〔表象〕を用いる。

以下、各作品の掲載資料(作品解説、図面、竣工写真)から読み取られる内容を精査し、考察を加えていく。

#### 1) {住居 No. 22} (改修竣工：2000. 11, 専用住宅, 木造+鉄骨造, 延床面積：210. 73 m<sup>2</sup>)

##### 分析項目

〔構成形式〕：庭を保存するという命題のもと、既存部に対し、所要機能をコンパクトにまとめた増築ボリュームが庭を囲うように配置された。増築ボリュームは鉄骨フレームが規則的に反復する形式が採用されている。

〔構造〕：鉄骨造の増築部は小さな増築部のスケールを抑えるためスリムな十字柱と梁とし、白塗装の構造体を室内に露出させている。既存の木造「改修」部は不朽部材に補修を行い、濃色の木軸構造体を室内に露出させている。

〔調度類〕：既存の環境を引き継ぎ、いつものモダンアートが敷地全体に無造作に配置される。増築部は鉄骨フレームの間に棚板を渡すことで開放された壁面展示スペースが空間と一体的に設えられている。既存部は各スペースのスケールや空間性に応じて固有のテーブルや椅子をセットし住み手の居場所が整えられている。

##### 分析の視点

〔作為〕：新旧の空間ボリュームが庭を囲う自然な建物配置、規則的な構造フレームの採用など、計画の合理から導かれる即物的な構成手法が取られている。

〔手掛かり〕：時間を蓄積したモダンアートにより暮らしの時間の厚みを感じ取り、「改修」への意識が築かれた。

〔再編〕：既存部分是不朽部を取り替え、整理し、再構成。下地の交換、補修、仕上げの削り直しなど丁寧で手間のかかる対処により、生活の痕跡や記憶の残像が維持されている。

〔変化を受け止めるもの〕：内藤自身の具体的言及は無いが、インフィル的構成要素の補助線となる規則的鉄骨フレーム、そのフレームを延長したパーゴラ兼用手摺に囲われたがらんだ屋上庭園に、変化する生活の設えと活動の受け皿としての意味を見出すことができる。

〔表象〕：蓄積された時間を表象する点在するモダンアートは時間の流れと記憶を想起させる空間要素として存在し、保存・再生された庭は現代的感性を纏う場として意識されている。

以上のように作品全体を通じて変わるものと変わらないものを意識した空間構成手法が用いられ、内藤の「改修」創作論の特徴との共通点を確認することができる。さらに、現代的感性の入った庭の再生にみる時間の部分切断と持続からは「改修」行為の意味を掴み取る手掛かりが得られた。内藤は作品解説の最後で次のように残している。“記憶を引きずれば、はばたくはずの空想は失速し、思考は滞留する。しかし、その滞留のなかに思考は時間の淀みやその肌触りを感じ取る。”<sup>99)</sup>後に共感を寄せることになる時間の動的平衡概念との呼応を予感させる言葉である。

#### 2) {住居 No. 1 共生住居} (改修 1 回目竣工：1995. 03, 専用住宅, 鉄筋コンクリート造, 延床面積：248. 00 m<sup>2</sup>／改修 2 回目竣工：2017. 10, 専用住宅, 鉄筋コンクリート造, 延床面積：248. 00 m<sup>2</sup>)

##### ◆改修 1 回目

##### 分析項目

〔構成形式〕：手狭になった 2 世帯住宅を屋外に拡張する形で複数の場所が整備された。各世帯の屋内領域は変更せず、敷地の隙間や余白のような場所に生活と余暇の空間が挿入された。

〔構造〕：既存の壁式鉄筋コンクリート造のリジッドな構造体の改修は行われていない。しかし、その領域の外側に抱き合わせるように玄関や水回りの機能を付加し、屋上に新設された庭園へのアプローチ階段も増設された。

〔調度類〕：屋内外で「改修」が試みられた。屋外では道路からの視線を柔らげるために、青々と茂る芝生の縁に沿って粗い木目を残した黒い木塀が設けられた。インテリアでは日本の空間(座位)にふさわしく、長時間座っても疲れない椅子が特注で誂えられた。

##### 分析の視点

〔作為〕：敷地や建物の余白部分を狙い空間が増設されているため「改修」前後で形態の違和感がない。さらに既存空間の表情を決定づけている、コンクリート打放し仕上げと黒の木板仕上げが増築部でも徹底されて使用されており、以前からそこに在ったかのように風景の一体感がある。

〔手掛かり〕：具体的に手掛かりとした対象について明記されていない。増設部の平面・断面構成が既存部の輪郭を補助線として計画されていることを読み取ることができる。

〔再編〕：制作された椅子は意匠や機能としての椅子の役割を超え、座位の高さとその上で過ごす時間について熟慮されている。いわば生活スタイルを一変させるような空間構成部材である。

〔変化を受け止めるもの〕：増設部にも展開された黒い木板仕上げは、それ自身は経年変化により姿を変えていくが、デザインコードとしての普遍性を有している。

〔表象〕：表象ではないが、階段廻りに勢い良く繁殖する植物をジャングルにたとえ、さらにトッブライトからの自然光が溢れる空間の利点を生命の生育環境に準えて説明している。

##### ◆改修 2 回目

##### 分析項目

〔構成形式〕：既存の壁式鉄筋コンクリート構造の変則グリッドが隙間のある空間を形成しており、変化する生活の設えをインフィルが時間と共に隙間を埋めていく構成をもつ。

〔構造〕：既存のコンクリート壁柱および床梁が変化を受け止めるものとして定義された。

〔調度類〕：既存家具の再配置、同じ敷物への新調交換、年代物の文物の陳列など改修前の事物が保持されている。

##### 分析の視点

〔作為〕：生活の設えと建築設備の物理的・機能的な改修を中心に即物的に解説されており、嗜好を示すものや感覚的な手法の説明は見られない。

〔手掛かり〕：具体的に手掛かりとした対象について明記されていない。構成形式の特徴でもある不規則グリッドへの生活の設えの挿入、コンクリートのセバ穴や構成部材の段差などに付加された調度類などに設計の起点となった空間構成要素を読み取ることができる。

〔再編〕：室の機能や家族の領域が不規則グリッドの生み出す空間単位毎に再編されている。特に複数の境界建具の再編により空間の連続性と透過性が微細に調整されている。

〔変化を受け止めるもの〕：既存のコンクリート壁柱および床梁は変化する生活の受け皿となり、骨董的調度類と庭の樹木は時間の基軸と空間の重みを加えている。

〔表象〕：骨董的調度は時間と記憶を表象するものとして、庭の木蓮と桜の木は生と死の象徴として記述されている。

この作品は2回にわたり「改修」が行われている。1回目は生活領域を不規則グリットの外側に拡張し、2回目は住人構成の変化を期に不規則グリットの内部の領域を改変している。これらの操作は大がかりなものではなく風景を劇的に変更するものではない。しかし、意識的または無意識に住み手の知覚に影響し、確実に生活の時間の流れが変わる。ここに時間の接続断面という「改修」創作論の特質を見ることができる。なお、この住宅は内藤の自邸であり、住み手として建築家により生きられる家である。

以上2作品(3回の「改修」)の分析を通して、創作論の言説分析から得られた特徴的項目についての具体的展開が確認された。さらに時間の接続断面という「改修」概念の特質との連関を指摘した。

## 5. まとめ

本稿は『現代建築「改修」作品における創作論および設計法』の研究の一環として、記憶や時間に寄り添う建築をつくり続けてきた内藤廣の2000年以降の独立住宅「改修」作品に着目し、その創作論および設計法を分析した。

創作論の言説分析では『住宅特集』誌に掲載された6論考(表1)を精読し、『主たる創作の意図』について述べられた重要言説を抽出。次に重要言説を『構造化(表2)』し、その意味と関係性をKJ法に準じて整理する過程を経て鍵語の『階層化』を行った。その結果、第1水準の鍵語を【設計思想】および【方法論】とする階層構成(表3)が導かれた。さらに、各鍵語について意味と鍵語の関係性を考慮の上分析し、【設計思想】に関する概念構造(図1)を析出した。そこでは《住まいの概念》を核とし《空間の概念》が全体を取り囲む構図および、〈時の流れ〉と〈記憶を継承〉を伴いつつ住まいと空間に改変を加える「改修」行為の位置づけが示された。【設計思想】の概念構造の考察からは4つの特徴が見出された。A1)《住まいの概念》の核には〈変化する生活〉があり、それは《時間の概念》の思考と共にある。A2)自由度の高い〈隙間のある空間〉を〈無作為〉の意図により創作する。A3)空間には〈変化を受け止めるもの〉と時間や記憶を〈表象するもの〉が存在する。A4)「改修」は単なる保存行為ではなく、新たな空間性を創出するものである。つまり、時間の部分的切断と接続を伴う創作行為である。その後、同様の方法で【方法論】に関する概念構造(図2)を析出した。そこでは《空間構成》により建築の枠組みが形成され《空間要素》《空間表現》《空間特性》により各作品の個性が特徴づけられること、その中心に目指すべき空間像があることが示された。【方法論】の概念構造の考察からは4つの特徴が見出された。B1)《空間構成》は既存の〈構成形式の継承〉または単純な構成をとる。B2)《空間要素》の再編と対比的《空間表現》により、新旧要素が複合(重層)した空間像が企図される。B3)〈変化を受け止めるもの〉として構造物が挙げられる。B4)「改修」「手法」は既存要素を〈手掛かり〉とし、〈最小限の操作〉で行われる。最後に【設計思想】と【方法論】

の相関を考察し相関図(図3)を析出した。ここからは次の5つの特徴が見出された。C1)空間像は〈単純な構成〉の〈隙間のある空間〉として立ち上がる。C2)構造物は変わらないものとして、自由度の高い空間を統合する。C3)時間や記憶を想起させる《空間要素》が再編される。C4)〈変化する生活〉を支える懐の深い空間像は建築家の〈無作為〉により生成する。C5)「改修」行為の意味は時間の部分的切断を伴いながら接続する時間の概念として、また既存要素を手掛かりとして参照しながら行う創作手法として、間接的に掴み取ることができる。さらに、動的平衡の概念を参照することで、内藤の「改修」創作論の特質は住まいが時間と空間の平衡を保ちながら、しなやかに再編されていく流れ中でのひとつの接続断面であるという結論を提示した。

一方、設計法の分析では、創作論の分析から導かれる3つの分析項目と5つの分析の視点を設定し、掲載資料を読み込み空間分析を行った。結果、創作論の言説分析から得られた特徴的項目について具体的展開が確認された。さらに時間の接続断面という「改修」概念の特質との連関を指摘した。

このように本稿では内藤廣の独立住宅「改修」作品の分析を通して、真に持続的な「改修」創作論および設計法の特質と意義を明らかにするための端緒を得た。しかし、より包括的かつ相対的な「改修」概念を探るためには過去に遡り多数の作品分析を行う必要があり、引き続き研究を進めていく。また、設計法の分析では分析図や写真を用いた定量的な解析を加え検証していく予定である。

## 文 献

- (01) 五十嵐太郎+リノベーション・スタディーズ 編：リノベーション・スタディーズ，INAX出版，2003.4.
- (02) 松村秀一，馬場正尊，大島芳彦：リノベーションプラス 拡張する建築家の職能，ユウブックス，2016.9.
- (03) 内藤廣：素形の建築，INAX出版，1995.1.
- (04) 内藤廣 編：クロノデザイナー—空間価値から時間価値へ，彰国社，p. 12，2020.11.
- (05) 内藤廣：住居No.1 共生住居，住宅特集2019年2月号，p.23，2019.2.
- (06) 末包伸吾：主題とその構成にみる建築家ルドルフ・シンドラーの論考の特質とその変遷，日本建築学会計画系論文集，vol.73，No.627，pp.1155-1164，2008.5.
- (07) 後藤沙羅，末包伸吾，増岡亮：伊丹潤の言説における【現代日本】の《建築》に関する思想，日本建築学会計画系論文集，vol.87，No.799，pp.1774-1785，2022.9.
- (08) 内藤廣 編：クロノデザイナー—空間価値から時間価値へ，彰国社，p. 11，2020.11.
- (09) 内藤廣：住居No.22，住宅特集2002年7月号，p.60，2002.7.